『歴代宝案』訳注本第七冊の刊行に際して

沖縄県教育委員会
教育長　仲村　守和

沖縄県は、かつて琉球王国として、独自の歴史を歩んできました。日本本土や中国、朝鮮、東南アジア諸国などと積極的に交易し、経済活動・文化交流を行ない、日本や中国から政治・経済・文化等に大きな影響を受けながら、独自の歴史を形成してきたのです。

なかでも中国明・清両王朝との進貢・冊封の関係は、沖縄の歴史や文化に大きな影響を与えました。中国との公的な関係は、一三七二年、中国の洪武帝が琉球へ使者を派遣して、明国の建国を告げ、入貢を促してきたことに始まります。これに応えて、琉球国中山王察度は弟の泰期を派遣しました。こうして中国との進貢貿易、正式の国家間交渉が始まり、以来、明治初年にいたるまで、琉球と中国の約五〇〇年間に及ぶ長い交流の時代が続きました。

十四世紀からおよそ二〇〇年にわたり、琉球国は中国との進貢貿易を軸としながら、日本、朝鮮国、シャム・パタニ（現在のタイ）、マラッカ（現在のマレーシア）、スマトラ・パレンバン・スンダ・ジャワ（以上現在のインドネシア）、安南（現在のベトナム）等の国々と交易を重ね、東アジアの一大貿易拠点として発展してきました。

これらの国々と交わした外交文書が、「歴代宝案」です。「歴代宝案」は、原文書あるいは写しや控えなどの形で外交を専任する久米村の天妃宮に保管されてきました。しかし長い年月の間に、これらの文書に破損・散逸の恐れが生じたため、首里王府は久米村にその編集を命じました。こうして一六九七年に『歴代宝案』第一集四九巻が二部作成され、首里王府と久米村にそれぞれ保管されることとなりました。この第一集には、一四二四年から編集時点の一六九七年までの外交文書が収録されています。その後、一六九七年から一八六七年までの琉球・中国間の往復文書は、『歴代宝案』第二集二〇〇巻・第三集一三巻として編集され、ほかに別巻八冊（うち、第二集目録四冊）が編集されました。

首里王府に保管された『歴代宝案』は、廃藩置県の際に明治政府に引き継がれたとされますが、いまだにその所在は不明です。一

方、久米村に保管されたものは、一九三三年に旧県立図書館に移管されましたが、去る沖縄戦で散逸してしまいました。しかし、幸いなことに、この久米村の保管したものから今に残る影印本や写本を数種残すことができました。

『歴代宝案』は、中・近世のおよそ五〇〇年にわたる外交関係往復文書で、沖縄の対外通交貿易史および外交交渉史を解明するうえで第一級の史料として、東アジア世界の動向をも知りうる貴重な史料でありますが、厖大かつ難解な史料であります。沖縄県は、平成元年度（一九八九年）から、現存する各種の影印本や写本を元に『歴代宝案』の編集事業に着手し、平成三年度（一九九一年）から刊行を開始しました。この編集事業の目的は、「歴代宝案」本文を校訂し、訳注本を作成して、これを利用しやすい形に編集することによって、今後の歴史研究の進展に役立て、あわせて一般への普及を図ることと、国際化時代における県勢発展の基礎資料として活用できることであります。

また沖縄県教育委員会は、平成二年（一九九一年）三月以来、中国第一歴史档案館との間で、琉球関係档案史料の収集、学術交流に関する協議書を交わしており、これまでに提供された史料は『歴代宝案』の校合・校訂・参照としてのみならず、琉球・中国交渉史の研究の発展に大きく寄与しております。

本年度は訳注本第七冊を刊行することになりました。訳注本は、『歴代宝案』の理解を補完するため、校訂本の漢文本文を全文読み下し文に改め、必要に応じて語注やルビを付したものです。訳注本第七冊には、清代乾隆五十三年～嘉慶四年（一七八八～一七九九）の間の往復文書が収録されています。琉球では国王が尚穆王から尚温王に代わり、中国では皇帝が乾隆帝から嘉慶帝に代わる節目の時期です。またこの時期は、中国と東南アジアなど周辺諸国との間で従来の冊封・進貢関係秩序に対する変化がみられ、一方で、琉球の進貢貿易がもっとも拡大した時期でもあります。第七冊では、琉球の進貢使節の活動がより詳細に記されるほか、乾隆帝の訓政、中国華南沿海への琉球船の漂着と送還、中国皇帝代替わりの上諭、冊封使派遣の要請など興味深い文書が含まれています。

最後になりましたが、本年度の訳注本の刊行につきましては、沖縄県歴代宝案編集委員会及び沖縄県歴代宝案編集調査委員会の御尽力、御協力を得ました。また訳注にあたっては、担当された濱下武志先生をはじめ、多くの皆様の御協力をいただきました。心から感謝の意を表して刊行のことばといたします。

平成二十一年（二〇〇九）三月